

名古屋市の観光資源改善に向けたフィールド調査の実践 —名古屋駅から主要観光施設を巡って—

情報科学ゼミナール 1315024 坂井 遼志朗

1. 研究動機・研究目的

名古屋市観光文化交流局が平成 28 年に実施した「都市ブランド・イメージ調査」によって、名古屋市は国内主要 8 都市のうち“最も魅力に乏しい都市”として全国に知られることとなった。名古屋市の市民推奨度（項目：現在お住まいの都市に買い物・遊びなどで訪れることを友人・知人に薦めたいですか）、訪問意向（項目：買い物や遊びに行きたいと思いませんか）、魅力度（項目：魅力的に感じる）がいずれも 8 都市で最下位であるなど、とりわけ観光都市の魅力に欠けるという調査結果が報告された。

その一方で、名古屋市観光文化交流局が実施した「名古屋市観光客・宿泊客動向調査（平成 27 年度）」によると、名古屋市の観光客数は増加傾向にあり、平成 27 年度は対前年度比率 102.1%となる 6,844 万人（観光入込客延べ人数）を達成している。魅力がないと評価されながらも、観光客を増やし続ける名古屋市の取り組みとはいかなるものであろうか。そこで、著者らは名古屋市の観光資源の魅力を明らかにし、さらなる改善提案を行うためのフィールド調査を実施した。

2. 研究方法

2017 年 3 月 7 日（12～19 時）に名古屋駅から主要観光施設を巡るフィールド調査を実施した。本研究における主要観光施設とは、名古屋市の観光施設を紹介する観光ガイドブックに基づいて選定した名古屋城、名古屋市科学館、大須商店街、名古屋港水族館、名古屋港駅周辺、東山動植物園、星丘テラスである。14 名の調査者は 3 グループに分かれて各施設を調査した：A グループ（4 名）：名古屋駅→名古屋城→、名古屋市科学館 名古屋市科学館→大須商店街、B グループ（5 名）：名古屋駅→名古屋城→東山動植物園→星丘テラス、C グループ（5 名）：名古屋駅→名古屋城→名古屋港駅→名古屋港水族館）。

調査者 14 名はいずれも首都圏に在住する大学生であり、そのうち、名古屋市を初めて訪れた者は 12 名（85.7%）であった。調査者はデジタルカメラを使用して良好事例と要改善点の写真を収集した。調査者は収集した写真を KJ 法によって構造化し、良好事例と要改善点の因子を検討した。

3. 主な結果と考察

3 グループが収集した良好事例と要改善点の写真を KJ 法によって構造化した結果、良好事例の写真からは、「見やすい標識」、「コンセプトの統一」、「ICT 端末の活用」、「来場者への配慮」、「景観への配慮」、「スペースの活用」、「高揚感の演出」の 7 因子を抽出した。第 1 因子は「見やすい標識」である。地下鉄の複雑の乗り換えでも迷わないように、目線の高さだけでなく地面にも案内標識がデザインしてあった。第 2 因子は、「コンセプトの統一」である。名古屋城において館内の注意書きが当時の掲示板をモチーフにして掲示されていた。名古屋城に直結する地下鉄の出口も、城郭のデザインが施されていた。第 3 因子は、「ICT 端末の活用」である。タブレット型の案内板を街中に設置することで、より効率的に観光客へ情報提供を行っていた。第 4 因子は、「来場者への配慮」である。東山動物園では、動物を囲う柵を可能な限り低くすることによって、来場者と動物の距離を近いものにしていった。第 5 因子は、「景観への配慮」である。名古屋城では、工事現場の壁に石垣がプリントされており、あたかも城の一部に見えるようになっていた。第 6 因子は、「スペースの活用」である。名古屋市科学館では来館者が休憩できる椅子やキッズスペースが十分に確保されていた。さらに、大須商店街では路上に商品を陳列できる幅が決められており、各店舗の店先に白線が引かれていた。これにより、歩行者も快適に歩くことができていた。第 7 因子は、「高揚感の演出」である。名古屋港駅では、壁にペンギンなどの絵を描くことにより、名古屋港水族館の来場者の高揚感を高めていた。

4. 結論

名古屋市のフィールド調査を通して、「見やすい標識」、「コンセプトの統一」、「ICT 端末の活用」、「来場者への配慮」、「景観への配慮」、「スペースの活用」、「高揚感の演出」の 7 因子が観光客数増加に影響を与えていると考えた。観光スポットとしての魅力は他の都市とは異なり、産業や文化と関連づけた観光が必要であることがわかった。

5. 卒業論文の執筆を終えて

卒論を執筆するにあたり、名古屋へ 2 回訪問した。フィールド調査の中で、知識の集約を提示するだけでなく、現地の方の意見や名古屋独特の文化を肌で感じる事が大切であることがわかった。本研究を人類働態学会で発表した際には、多くの研究者の方から、具体的なアドバイスをいただくことができた。特に、改善調査の中で、改善点に注目してしまっていることに対して、小木氏から「世の中は良好事例の集積だ。」という言葉をいただいた。この言葉・考え方を、これからの私の人生の中で大切にしていきたい。